

## 「ツタンカーメン」と古代エジプト

増山雄三

紀元前十四世紀、古代エジプト第十八王朝の、十二代目の王（ファラオ）だった「ツタンカーメン」は、運命に弄ばされた少年王として、また、殆ど無傷の王墓を今日に残していた、例外的な王として、古代エジプト王の中では、最も人々に親しまれている。

それでも、治世の様子は殆ど分らなかったが、近年、当時の高官などの墓で調査が進んで、前王だったイクナートンの、宗教改革頓挫を経て、信仰復興に努めた、具体的な様相が見えてきたのである。

それで、近年、王墓の膨大な副葬品の科学分析によって、当時のエジプトが周辺地域との交流を通じて、技術革新を進めた様子が分ってきて、ファラオの権力が、どう形成されたかの研究も進み、世界最古のビール工房跡

も発見され、ビールが権力生成の手段になっ  
ていた、という説も出ている。  
ところで、ツタンカーメンの王墓が、英国  
の考古学者である、ハワード・カーターによ  
って発見されたのは一九二二年で、今からち  
ょうど百年前の事だが、「何か見えるかね」  
「はい、すばらしいものが」と、墓の内部を  
覗くカーターと、脇に立つカーボン伯とのや  
り取りを、カーターが書き残している。  
そこには、数々の奇妙な動物に彫像、それ  
に黄金などもあり、また、いたる所に黄金の  
煌めきもあったので、この発見はツタンカー  
メンの事を、一躍、古代エジプトで最も有名  
なファラオ（王）にしたのだ。  
それでも、このような颯爽とした登場の姿  
とは違って、その知名度とは裏腹にして、治  
世の様子は殆ど知られていないので、その死  
後には、歴史からも抹殺された王になってし  
まったと、金沢大学の河合教授はいう。  
それで、ツタンカーメンの父である、アク

エンアテンは在位中に、伝統的なアメン神中心の多神教信仰から、太陽神であるアテンの  
みを崇拜する国家宗教に転換したのは、ア  
メン神官団が力を強め、王権の脅威になってい  
た事が、その背景にあったという。  
それで、首都もテーベからアマルナに移し  
たが、改革はアクエンアテンの死で頓挫して  
しまい、幼くして王位に就いたツタンカーメ  
ンは、アメン信仰を復興させるが、肝心の彼  
も、十八才前後の若さで死んでしまう。  
それで河合教授は、伝統の信仰を否定した  
アクエンアテンと、その息子のツタンカーメ  
ンは、後の王たちにとっては異端であり、伝  
統的な王としての正統性のためにも、その存  
在を消す必要があったのだろう、と話す。  
そんなことあって、ツタンカーメンが建て  
た、数多くの建造物は破壊されてしまい、お  
まけに、王名表からも彼らの名前が消されて  
しまい、存在すら抹殺されてしまったのが、  
後世の研究を阻んだ要因だという。

状況が変わったのは、一九八〇年以降にな  
ってからで、ツタンカーメンの乳母や高官た  
ちの発見が相次ぎ、文字や図像それに遺物な  
どの、新たな資料の蓄積が進み、それらの分  
析から、ツタンカーメンが、信仰復興をどの  
様に行ったかが、明らかになってきたのだ。  
それは、かつてのアメン中心信仰でなく、  
太陽神のアモン・ラーなど他の神々とアメン  
神のバランスを取るといふ、新しい形の国家  
宗教を作つて、新しい神官組織を作つた、と  
河合教授はいい、またそれによつて、国の宗  
教と政治が大きく動いたとみる。  
それは、まだ九才になつたばかりの、幼い  
ツタンカーメンに代わつて、国家を担つた高  
官は、アクエンアテン右腕だった老臣のアイ  
と、軍を率いた大將軍ホルエムヘブで、その  
二人の関係もみえてきて、アイは王の後見人  
となり、ホルエムヘブは国土の実質的統括者  
として、役割を分担していた。

それが、ツタンカーメン王が十八才の若さ

で亡くなったので、二人のバランスが崩れてきて、当然ながらツタンカーメンには子がなかった。アイが王位に就いたあと、ホルエムヘブを政権の中核から排除したので、二人は深刻な敵対関係に陥った。

それでも、アイが四年程で死去すると、今度はホルエムヘブが即位し、アイとその関係者の記念物を、徹底的に破壊し、彼は王としての正統性を示すため、石碑に刻まれたツタンカーメンの名を、自分の名に書き変えた。

それは、あたかも、自分がアメン信仰を復興させたように装うためのものであり、こうして、ツタンカーメンが歴史から抹殺された背景には、激動の中での権力闘争があったのだと、河合教授は読み解いている。

それで、二十世紀に入って、王家の谷で見つかった、ツタンカーメンの墓には、黄金のマスクや王のミイラも発掘されたが、膨大な副葬品については、まだ一部しか研究されていなかったが、近年、日本とエジプトの専門

家たちによる、調査と保存修復が進んで、新たな事実も僅かながら分ってきた。

例えば、金張りの二輪馬車は、「戦車」と考えられていたが、移動用の日よけつき天蓋と、一体になった儀式用だったと分ったが、車体に使われたニレの木はエジプトになく、周辺地域から運ばれた様で、二輪車自体は西アジアからきて、エジプトで改良されたもので、それらを基にエジプトで技術革新が行われ、繁栄に繋がっていった様相が、副葬品の分析でさらに分った。

ところで、古代エジプト人は「ビール」好きだったというが、エジプト考古学研究所の馬場客員教授は、王朝が誕生する直前だった時代の、ヒエラコンポリス遺跡で、紀元前三千六百年頃の、世界最古のビール工房跡を発見して、それを写真に収めている。

それを見ると、大がめを少なくとも五基も並べて埋め、火を焚いて加熱する構造になっている、最大で三百二十五リットルのビール

を醸造出来たと考えられるもので、残された  
残留物の分析で、人為的にアルコールを作っ  
ていたことが確認された。  
さらに最近になって、その近くから大量に  
出土した、同じ形の土器の分析で、内面にア  
ルコールを作った際にでる、澱粉も確認され  
たので、それが、醸造したビールの容器だっ  
た、という事も証明された。  
また、同様の容器は、ヒエラコンポリスの  
周辺からは、時代とともに、王朝時代の中心  
組織となる、北側に広がっていったのではな  
いか、という事も考えられているとはいえ、  
それでも、工房跡は居住区域ではなく、有力  
者の墓の側にあったのである。  
それで馬場客員教授は初期の権力者が、  
儀式などでビールを振舞い、それによって自  
らを特別視させ、後のフアラオに繋がるとい  
う、権力形成が進んだのではないかとその  
結果について話している。

令和四年四月